

氏名	伊藤 亜矢子 ITO Ayako
所属 職名	人間文化創成科学研究科人間科学系 准教授
学位	博士（教育学）
専門分野	学校臨床心理学、コミュニティ心理学
URL	http://www.develop.ocha.ac.jp/ittoa.html
E-mail	ito.ayako@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

コミュニティ・アプローチ
学級風土
スクールカウンセリング
実践研究
コンサルテーション

Community Approach
Classroom Climate
School Counseling
Collaborative Action Research
Consultation

主要業績

Ito,A.(印刷中)Enhancing school connectedness in Japan: The role of home room teachers in establishing a positive classroom climate. Asian Journal of Counselling,18

Smith, D. C.,Ito, A., Gruenewald, J., Yeh,H.(2010)Promoting School Engagement: Attitudes Toward School Among American and Japanese Youth. Journal of School Violence,9(4), 392-406.

伊藤亜矢子 編著 (2011)エピソードでつかむ児童心理学 ミネルヴァ書房

伊藤亜矢子 (2010) 第6章 学校環境のアセスメント 松本真理子・金子一史編著 子どもの臨床心理アセスメント：子ども・家族・学校支援のために 金剛出版, 126-131.

伊藤亜矢子(2010)全校型支援を行う「スクールカウンセリング」の理論的検討??スクールカウンセラーの役割を中心に?, 日本心理臨床学会第27回大会発表論文集

研究内容 / Research Pursuits

国際比較に基づくスクールカウンセラーによる教師支援方法の開発。ASCA（米国スクールカウンセラー協会）のCarol Dahir氏と定期的に連絡をとりあい、現職スクールカウンセラーのFocusグループを毎月行うなどして、コミュニティ・アプローチを行うスクールカウンセリングについて新しいテキストの執筆に着手した。また、学術振興会短期招へいにより全米暴力防止協会のDouglas Smith氏を約2ヶ月間受け入れ、米国のスクールカウンセリングモデル等について検討した。学級風土質問紙

(Classroom Climate Inventory)の開発とそれを応用した学校支援。?教師個人レベルでは、CCI結果を媒体とした教師コンサルテーション、?学級レベルでは、CCI活用シートを利用した学級と個人の双方に焦点をあてたコンサルテーション、学級ニーズをふまえたスクールカウンセラーと教師の協働による心理教育、?学区・学校レベルでは、CCIを用いた教師教育、等の実践研究を行っている。特に2010年には、コンサルテーションと共に、小学校版および中学校版学級風土質問紙の解析ソフトの開発・改良を行った。スクールカウンセラーの学校全体への支援を促進するパッケージツールの作成。2010年度には、学級風土アセスメントを基にした、オーダーメイドの心理教育プログラム開発と小冊子の改訂作成を行い、2009年の香港における包括的スクールカウンセリングモデルの視察・検討につづいて、スコットランド・アイルランド・韓国の実践について現地およびメールでの研究交流を行った。

Development of teacher and student mentalhealth support programs from international comparison.In 2009-2010, the project of translation and adaption of new school counseling text book was started with Dr.Carol Dahir from New York Institute of Technology

■ 教育内容 / Educational Pursuits

伊藤研究室では、子ども・学校・地域・コミュニティをキーワードに、各人のテーマに応じて、実践研究を行っています。臨床心理学・コミュニティ心理学・教育心理学・学校心理学の知見を元に、学校内外での、子ども支援を促進する方法の開発やシステムづくりをめざした実践研究です。例えば、小学校・中学校・高等学校で、一教室あるいは、T T 枠などを提供してもらい、相談室を創設し相談システムづくりを実践的に検討するなどを、大学院生と学部学生が協力して行っています。大学院生の多くは、心理臨床センターに所属し、相談事例について、伊藤のスーパーバイズを受けます。伊藤が母親面接、大学院生が子ども面接を担当する場合も多くなっています。そのほか、大学院生は興味に応じて外部実習に行っています。

In our laboratory, students do the action researches cooperated with each other focusing on their own topics in schools & communities. Their key words are prevention, mental health, children, youth, school, community. Research methods are based on commun

■ 研究計画

現在行っている実践研究を継続し、学校内外の子ども支援システムづくりについて、実践的な知見を提供する。特に、スクールカウンセラーによる日本型の全校支援方法や、教師による子ども支援や学級づくりの方法を臨床心理学の知見から探求する。06年度には学級風土質問紙 (CCI) のマークシート化ができ、09-10年度には、小学校版の公開と小学校版を含む質問紙の分析システムの改良整備を行った。また、全校支援に関する教員向けパンフレットの作成や、カウンセラー向けテキストの執筆 (継続中) を行うと共に、米国・スコットランド・香港・台湾などの全校支援について検討を行ってきた。今後も、学校全体の支援に向けたパッケージツールの作成 (H20?22年科学研究費基盤(C) 20530623) から引き続いて、国際比較に基づく、日本型スクールカウンセラーの全校支援モデルの構築とツールの作成整備 (H23?25年科学研究費基盤(C)23530891採択内定) が課題である。

■ メッセージ

自分なりのテーマ関心を持ち、実践の場で創造的な実践研究ができる人材を求めています。それぞれが自分の意見・センスを生かしながら、お互いに協働することで、学校という場や地域で、その場所の専門家である現職教員の先生方等と協働し、子ども支援を展開することは、やりがいのある実践研究活動です。スクールカウンセラーに重要なのは work with すなわち他業種も含めた協働。それに環境要因や発達の要因も含めた適切な問題理解の力ではないでしょうか。助け合い切磋琢磨しながら、創造的な臨床心理士・実践的研究者として成長していける研究室をめざしています。